

# ユマニストとデカルトの時代における社会階層の諸問題

## ——その社会思想史的意義——

佐 藤 三 夫

### I 批判的問題提起

——ルネサンスとデカルト——

デカルトは『方法序説』の冒頭に、「この世のもので最も公平に配分されているのは良識 le bon sens である<sup>1)</sup>」と言っている。

この言葉によってデカルトは、おそよ1世紀半も先んじて、ブルジョワ革命のための宣言を行なったのであろうか。それともそれは、ただまったくスコラ学的な命題なのであろうか。あるいは反ルネサンス的標語なのであろうか。デカルトがたとえスコラ学やルネサンス・ユマニズムから脱け出したとしても、彼をデイドロやルソーのような啓蒙思想家の列に加えることができるだろうか。デカルトをブルジョワジーの中に加えることはできるかもしれない。しかしその場合の「ブルジョワジー」という用語は、ブルジョワ革命或は産業革命以後において支配階級となったブルジョワジーと同義的なのだろうか。デカルトがブルジョワであると言う場合、この「ブルジョワ」概念はスコラ学と相容れなかったとしても、少なくともユマニズムと適合的でなかったということが証明できるだろうか。要するに、デカルトの思惟を導いた価値理念が問題である。そしてその価値理念に照してみるとき、上のデカルトの文章は何を意味しているのだろうか。

実際、アンリ・ルフェーヴルはその『デカルト』の中で、『方法序説』はそのはじめから、革命的な文章として読みなおさなければならない<sup>2)</sup>」として、そのテキストを「ただ自由に

批判的な思惟のプログラムだけでなく、また民主主義のプログラムをも提示している<sup>3)</sup>」ものとする。そして結局のところ、『方法序説』は上昇期にある階級、すなわち第三階級の革命的宣言と見なされるべきである<sup>4)</sup>」とまで断言する。だがいったい、ブルジョワ革命よりも1世紀半も遡った時代において、上昇期のブルジョワジーの革命的宣言なるものが公けにされるような、社会経済史的或は社会思想史的諸条件がととのっていたのであろうか。それともデカルトの何かしら神秘的な天才的ひらめきが、それらの諸条件をいっきに飛び越えたとも言えるのだろうか。

われわれがルフェーヴルの「デカルト説の歴史的諸条件」の章を読んで直ちに感じることは、彼が商業ブルジョワジーと産業ブルジョワジーとを未分化に混同していることである。そのため彼は、ルネサンスと16世紀が歴史に亀裂を画さなかったことのみを強調して、その固有の歴史的特性を明らかにすることなく、中世封建制の図式的説明をもって代え、「ブルジョワジーはなお、『対自的』階級としてよりも、むしろ『即自的』階級として行動している。ブルジョワジーのあきらかな意識は、18世紀になるまで生まれないであろう<sup>5)</sup>」と言う。だが「即自的」ブルジョワ階級とか「対自的」ブルジョワ階級なる用語は、経済学的範疇にも歴史学的範疇にもなりえない没概念的な表現である。それ故結局のところルフェーヴルのデカルト論は、学問的研

et Aujourd'hui, 1947, p.40. 服部英次郎・青木靖三訳『デカルト』岩波現代叢書, p.29.

3) Ibid., p.42. 同上訳, p.31.

4) Ibidem.

5) Ibid., p.89. 訳, p.70.

1) René Descartes, *Discours de la Méthode*, AT. VI, p.1. 落合太郎訳『方法序説』岩波文庫, 昭和31年, p.6.

2) Henri Lefebvre, *Descartes*, Paris, Éditions Hier

究の分野から文学的エッセーの分野へ滑り落ちることになる。それ故まずブルジョワジーの学問的概念規定が明確にされ、その歴史的展開の中でデカルトが位置づけられなければならない。

ところでエチエンヌ・ジルソンによれば、先にあげたデカルトの文章において「良識」le bon sens という表現は、二つの異なった意味を受けいれうる。「第一は、真なるものを偽なるものから区別する能力。それは、『良識』という表現がこの章句においてもっている意味である。第二は、知恵<sup>6)</sup>」。この第一の意味においては、それは略した形で sens とも言われる。この表現は、理性 raison と同義語である。「良識」bon sens はまた自然的光 lumière naturelle と類似している。デカルトはその書簡の中で言っている、「すべての人間は同一の自然的光をもっているので、彼らはすべて同じ考えをもつはずであるように思われる。しかし……この光を正しく用いる人は殆んどいない<sup>7)</sup>」。この意味における「良識」はそれ故、むしろスコラ哲学と関連している。これに対して第二の意味における「良識」の表現は、ストア派的意味<sup>8)</sup>における知恵 Sagesse を指している。デカルトは『哲学の原理』の序文の中で、「この哲学なる言葉は知恵の探究 l'étude de la sagesse を意味し、知恵とは単に処世の才能ではなくして、生活の行動についても、健康の維持やあらゆる技術の発見についても、人間の知り得るすべての事物の、完全な知識を意味する<sup>9)</sup>」と言っている。このような知恵の考えは、ルネサンス・ユ

マニズムに由来している。

ところがジルソンによると、「ルネサンスの知恵は、いわば内容のない知恵であった。それは単に学問から区別されていたばかりでなく、学問に対立していた<sup>10)</sup>」。そして賢者 le sage と学者 le savant とは対立概念であった。ルネサンスの学問は本質的に人文学者の博識にあり、それ故それは記憶の問題であった。これに対してデカルトは、数学を学問の典型とみなすことによって、学問を記憶から理性へと移行させた。そうすることにより彼は、ルネサンスによって宣告された学問と知恵との絶縁を止めさせた。このようにしてジルソンは言う、「デカルトとともに近代思想は、いわばルネサンスから抜け出るのである<sup>11)</sup>」。それにも拘らずジルソンは、その処女作 Index Scolastico-Cartésien 以来、デカルトの体系形成における中世思想の影響について研究してきたのではないか。トマス主義者のジルソンにとって、トマス以後のすべての哲学はトマス説の派生形態であり、しかもその墮落形態ではないのか<sup>12)</sup>。そして結局のところわれわれはトマスの落穂拾い以上のことはなし得ないのであり、生まれてきたのが遅過ぎたということになる。

デカルトがルネサンスから抜け出たというジルソンの見解は、アンリ・グーイエによってさらに徹底的に推し進められる。グーイエはその『デカルトの初期の思想——反ルネサンスの歴史への寄与』において、若いデカルトは、彼が中世からまぬがれるときに、ルネサンスの精神に対して激しく反発しているとしている。そして「数学的物理学の形而上学である自然の哲学、方法が博識を排除する精神の哲学を、デカルトの初期の思想が表明しているこれら二つの志向は、『ルネサンス』のいろいろな改革者に共通している志向から根本的に区別する。それらは

6) Étienne Gilson, *Commentaire du "Discours de la Méthode"*, Paris, J. Vrin, 1947, p.81.

7) *Lettre à Mersenne*, 16 Octobre 1639, AT. II, p. 597.

8) 「それにしても彼らは自身愚者で、気まぐれで、後悔の念に苦しめられる者ではあるが、大きな快楽を受けることには変わりはないが、そういう時に彼らはあらゆる悩みから離れているにしても、同様に健全な精神 bona mens からまた遠く離れているということは認めなければならない……」(Seneca, *De Vita Beata*, XII, 1 ((*Moral Essays*, II, Loeb Classical Library, London, William Heinemann, 1958, p.128)). 樋口勝彦訳『幸福なる生活について』p.22.)

9) *Les Principes de la Philosophie*, AT. IX, p.2. 桂寿一訳『哲学原理』岩波文庫, p.12.

10) Gilson, *Commentaire*, p.93.

11) *Ibid.*, p.94.

12) Henri Gouhier, *Les Premières Pensées de Descartes, Contribution à l'Histoire de l'Anti-Renaissance*, Paris, J. Vrin, 1958, p.9.

『反ルネサンス』l'Anti-Renaissanceを構成するものでなかろうか<sup>13)</sup>』と言っている。

このようにして結局のところ、いったいデカルトは、スコラの末裔なのであろうか、それともルネサンス・ユマニストの一分枝なのであろうか、またもし彼の思想が「反ルネサンス」であるとするなら、積極的には何なのであろうか。はたして彼は、ルフェーヴルの言うように、マルクスの共産党宣言に匹敵するような、第三階級の革命的宣言を行なったのであろうか。つまり、彼の哲学がもたらした固有の社会思想的意義は何であったのか。

それらの問題を解明するのに、恐らく最初のある手がかりを与えられるのは、すでに掲げた『方法序説』冒頭の文章であり、デカルトがそのすべての著作において、良識の探究をその哲学の主題とし、スコラの学識ある人士よりもむしろ *Honnête homme* (良識ある人士) をその望ましい読者として目ざしたということである。なぜならストロウスキーの言うように、「デカルトにとって、人間完成の典型となるものは、やはりオネートムであり、貴紳 *gentil-homme* である<sup>14)</sup>」から。

実際、デカルトはその『自然の光による真理の探究』において、「この自然の光こそは、まったく純粹のまま、宗教や哲学のたすけを借りなくとも、オネートムが自己の思惟を占め得るあらゆる事物に関してもつべき意見を決定し、しかも最も珍奇な学問の秘奥にまでも達するものである<sup>15)</sup>』と言っている。そしてオネートムは、学問に余りに時間を費す必要がないと言っている。なぜなら一生の最大部分は良き行為の実践にあてられなければならないからであり、

しかもこの行為は彼自身の唯一の理性によって教えられなければならない、としている。それ故デカルトにおける「オネートム」 *honnête homme* とは、自己の理性の教示する良き行為によって生きる人のことを意味するものと考えられる。

当時において「オネートム」は、誠実な人という意味のほかに、市民生活においてひとから愉快に思われる性質をそなえた人を意味していた<sup>16)</sup>。モンテーニュも、「私が親交を求める人々は、『高雅にして有能なる人士』 *honnêtes et habiles hommes* と呼ばれる人々である。これらの人々の面影は、私をして他の人々を厭わしめる。だがよく考えてみると、それはわれわれ人間の間で最も稀な資性、われわれがもっぱら自然に負うところの資性である<sup>17)</sup>』と言っている。「よく生まれついた上に人々との交際の間に練磨された魂は、ひとりでに十分愉快なものになる。学芸とは、かかる魂の生み出すのを検査登録したものにはほかならない<sup>18)</sup>」。

パスカルもまた、「彼は数学者だ、説教師だ、雄弁家だ、などといわれなくて、ただ、彼はオネートムだ、といわれなければならない。この普遍的な性質だけが、私には好ましい<sup>19)</sup>』と言っている。

このようにモンテーニュ、デカルト、パスカルにおいて、それぞれ多少のニュアンスの違いはあっても、共通してオネートムが理想的な人間像として求められたということは、その背後に、彼らをつなぐ共通の生活基盤があったためではなかろうか。それが彼らに共通の価値理念を抱かせることになったのではなかろうか。

その問題に関し、ルフェーヴルの述べるところ

13) 例えば彼の『中世的ユマニズムとルネサンス』(É. Gilson, "Humanisme Médiéval et Renaissance", in *Les Idées et les Lettres*, deuxième édition, Paris, J. Vrin, 1955) はそうした価値理念の下に書かれている。さらに彼の『存在と本質』(*L'Être et l'Essence*, Paris, J. Vrin, 1948) は、近代哲学一般をそうした理念によって批判しようとしている。

14) Fortunat Strowski, *La Sagesse Française*, Paris, Plon, pp.155-6.

15) Descartes, *La Recherche de la Vérité par la Lumière Naturelle*, AT. X, p.495.

16) É. Gilson, *Commentaire du "Discours de la Méthode"*, p.113.

17) Montaigne, *Essais*, liv. III, chap. III (*Œuvres Complètes de Montaigne*, textes établis par Albert Thibaudet et Maurice Rat, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1962, p.802).

18) *Ibid.*, p.802.

19) Blaise Pascal, *Pensées*, *Œuvres Complètes*, texte établi par Jacques Chevalier, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1954. p.1098.



彼の署名された書物の巻頭には、彼の名前が、**M. Des Cartes** と二語に印刷されていた。

「しかしこの小貴族ということよりももっと価値のあったことは、彼の家族の成員の大部分が、公職或は自由職業についていたということである<sup>24)</sup>」とアダンと言っている。サン家の側の多くの者は商人であったが、またすでに財務のための王の官吏でもあった。プロシャール家は司法および警察の職についていた。フェラン家の人々は学問研究にたずさわっていた。

だがデカルトの家族が16世紀末から、とりわけ17世紀において頭角をあらわすようになったのは、高等法院の社会に昇進したという境遇によってである。哲学者の父ジョアシャンは、1586年2月14日に任命されて、ブルターニュの高等法院の評定官となった。そのため後にジョアシャンはポアトゥを去り、レンスに家を買って(1607年頃)その家族を住まわせた。

ジョアシャンの妻ジャンヌ(旧姓 Jeanne Brochard)は5人の子供を生んだ。長男ピエール Pierre(洗礼証明書:1589年10月7日)は死亡したので、次男(1591年10月19日)もピエールと名づけられた。彼が哲学者の兄となった。われわれの哲学者 René(1596年4月3日)はそれゆえ3男であった。末子(1597年5月13日)は生まれると間もなく死に、そして3日後(1597年5月16日)にその母の命をも失わせた。その外にもう1人の子供、すなわちジャンヌ Jeanne という娘があったが、その洗礼証明書は見出されなかった。その誕生は1590年から5年の間であろうと言われている。

ジャンヌの死後ジョアシャンは、ナントのブルターニュ人であるアンヌ・モラン Anne Morin と再婚した(1600年頃)。アンヌの生んだ子供にはジョアシャン(1602年頃)、クロード Claude(1604年11月9日受洗)、フランソワ(1609年)、最後にその母と同様アンヌと名づけられた娘があった(1611年5月25日受洗)。

ジャンヌ・デカルトはラ・シャペル聖堂区の

クレヴィの領主であるピエル・ロジェと結婚した(1613年4月21日)。ピエル・デカルトはブルターニュ高等法院の評定官となった(1618年3月10日に任ぜられ、4月10日に受け入れられた)。ジョアシャンはその2度目の妻の息子(彼と同様ジョアシャンと名づけられた)のためにその評定官の職を譲ってやめた(1627年7月10日、ブルターニュの高等法院で認められた)。

このようにして、以後デカルト家は高等法院においてつた職から貴族身分であることを引出した。

### III ユマニストの家系

西ヨーロッパにおける16世紀以降のユマニストの家系を調べてみると、ある特定の社会階層の出身であることが知られる。その殆どすべてがいわゆるブルジョワ地主の出身であり、さらにそれから官職保有者へと成上がったものも多い。

ホイジンガによると、エラスムスは「出生が合法的でなかったため、彼の家系や縁戚関係には神秘のヴェールがかけられている<sup>25)</sup>」。彼は聖職者の生ませた私生児で、その家族は当時のブルジョワの家系に属していたことが知られているにすぎない<sup>26)</sup>。

エラスムスの親友のトマス・モアの場合は、もっとよく知られている。E. M. G. ルースによると<sup>27)</sup>、トマスの父ジョン・モア(1453年頃生れる)は、ハートフォードシャーに土地を所有しており、ノース・ミムズの近くのゴビオンズあるいはガビンズという荘園をもっていた。だが彼は主にロンドンに住み、法律を職業としていた。彼は butler, steward, リンカーン法曹学院の reader, barrister そして serjeant-at-law となり、後年には騎士の爵位を授けられた。その上彼は人民訴訟裁判所の判事となり、そしてつい

25) J. Huizinga, *Érasme*, traduit par V. Bruncel, Paris, Gallimard, 1955, p.30. 宮崎信彦訳『エラスムス』筑摩書房, p.13.

26) *Ibid.*, pp.31-32. 同上訳, pp.13-14

27) E. M. G. Routh, *Sir Thomas More and his Friends 1477-1535*, New York, Russell & Russell, 1963, p.1.

24) *Ibid.*, p.7.

に王座裁判所の判事となった。

フランソワ・ラブレーの場合はどうか<sup>28)</sup>。1457年ギョーム・ラブレーという者が、シノンの南、スイイの修道院の *fermier* (定量小作農) として現れる。フランソワ・ラブレーの父アントワヌ・ラブレーは、15世紀末の人であった。彼は法学士で、国王直轄のシノン裁判所付の弁護士であった。財産もあった。シノンに大きな家を、ドゥヴィニエールには別荘を、そしてシャヴィニ・アン・ヴァレーには小さな城すなわち「貴族の邸」をもっていた。さらにいくつかの畑をもっていた。これらの田舎の地所は、彼の妻によってもたらされたものと言われている。二宮敬氏は、このアントワヌ・ラブレーを、はっきりと「新興ブルジョワ地主」と呼んでいる<sup>29)</sup>。

モンテーニュについてはかなりよく知られている。彼の本名はミシェル・エイケム *Michel Eyquem* と言ったが、エイケム家は代々ボルドー市の商人であった<sup>30)</sup>。15世紀にラモン・エイケムは、大青、葡萄酒および塩づけの魚の商売をした。彼は1477年に、ペリゴールにあるモンターニュ *Montaigne* の小封地を買った。ラモンの長男とともに一家は市の栄職についた。すなわち、卸業者グリモン・エイケムは、ボルドー市の吏員および裁判官となった。グリモンの長男ピエルとともにさらに昇進は続いた。彼は剣をとってイタリア遠征に赴いた。そして1554年にはボルドーの市長となり、同じ年に王がつくったばかりのペリグーの御用金裁判所の評定官となった。ピエルはその土地で貴族として暮した。彼は所有者としてその葡萄酒を売ったが、彼とともにもはや大青も塩魚も問題となくなった。そしてその息子のミシェルはボルドーの高等法院の評定官となった。

近代哲学の祖としてデカルトとならび称せられるフランシス・ベーコンにしても、事情はさほど異ならない。フランシスの父ニコラス・ベーコン卿は、国璽尚書にして大法官という高位にあったが、ニコラスの父はヨーマンの農夫であった<sup>31)</sup>。

デカルトよりもやや後のブレーズ・パスカルの場合を見てみよう。エミール・ブトルーによると、「ブレーズ・パスカルは、オーヴェルニュの旧家の出であって、先祖の一人、参事院請願委員エティエヌ・パスカルは、国王ルイ11世によって、貴族に列せられていた。この法服の貴族は、いかに由緒の古いものであっても、武家出身の貴族階級よりは、やはり市民階級に一層近いものであった。……パスカルの父、エティエヌ・パスカルは、その父もその祖父も財務官吏であったが、低オーヴェルニュ税務裁判所における国王のために選ばれた参事員として、クレルモンに在った。彼はやがてモンフェランの御用金審査院の副総裁になった<sup>32)</sup>」。だがストロウスキーは言っている、「パスカルの家はオーヴェルニュの出であり、2代前からさまざまな任務や官職によって貴族に列せられた家柄の良い市民階級であるが、まだ商人や実業家などの低い世界にまったくはまりこんだままであった。パスカルは『オーヴェルニュ貴族』 (*Patricius arvernus*) と署名するのであるが、彼はそう署名する権利をもち、それを誇る権利さえももつであらうし、本当に貴族となることだろう。ただしできたての貴族なのである<sup>33)</sup>」。

こうした事例はなおいくらかでも集められるが、ただその何れも殆ど同様な由来を示しているということを注意するだけで、もはや充分であらう。

28) Cf. Introduction par Jacques Boulenger dans "Œuvres Complètes de Rabelais", Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1955.

29) 二宮敬, ラブレー年譜, 『チョーサー・ラブレー』筑摩書房, 昭和36年, p.386.

30) Cf. Gustave Lanson, *Les Essais de Montaigne*, Paris, Mellottée, 1948.

31) Catherine Drinker Bowen, *Francis Bacon—The Temper of a Man*, London, Hamish Hamilton, 1963, p.19.

32) Émile Boutroux, *Pascal*, Paris, Hachette, p.7. 森有正訳『パスカル』創元社, p.5.

33) Fortunat Strowski, *La Sagesse Française*, Paris, Plon et Nourrit, 1925, p.210. 森有正・土居寛之訳『フランスの智慧』岩波現代叢書, p.164.

#### IV 16～7世紀フランスにおける 社会的身分の問題

以上のように、16世紀以降17世紀にいたるユマニストおよびデカルトの家系を調べて知られることは、その家柄が共通して富農→商人→地主→官僚というコースを辿って発展していることである。その点において、ユマニストとデカルトとの間に本質的な相違は見出されない。そしてフランスの場合、高等法院官僚 *Parlementaire* は、その上昇コースの最終にして最高の到達点とされていた。

R. ムーニエによると、商人などの家柄の低い者が、司法官の官職に迎え入れられるためには、金銭のみをもってしては許されなかったのであって、「最もしばしば、商業から財務へ、財務から司法官の下級職へ、あるいは王室書記官へと、次第に箔をつけてゆくことが必要であった。それから、司法官へ、バイイ裁判所の総代官へ、あるいは最高法院の官職へ、次いで訴願審査官の官職へ、また国務顧問会議の官職へと、達することが期待されえた。(そこへ達するには) 最もしばしば、2, 3, 4 世代、一般的には4 世代を要した<sup>34)</sup>」。またユベール・メティヴィエによれば、「平民の地位から、まず官職を、次に封土、莊園を買入れ、法服貴族から、さらに上層の剣貴族、ときには社会の頂点であるデュクの爵位にまで上昇するのに、往々、5・6 世代で充分であった<sup>35)</sup>」。

つまり、このようにして上昇転化してゆく商人的寄生地主の階級こそが、ユマニストの社会的基盤なのである。そしてかかる商人的寄生地主階級が絶対王制の経済的・政治的支柱となるとともに、ユマニストは絶対王制の文化的・教育的政策の代弁者となった。

しかし農民→商人地主→官僚というこうした上昇転化がかなり広範囲に可能になったということは、封建的身分制社会が危機に立ちいたっていることを示している。つまり旧貴族層による領主制から、いわゆるブルジョワ貴族層による領主制への変遷が問題である。

16～7 世紀フランスにおける社会的階層 *stratification sociale* の問題を、われわれは近代的な意味での社会的諸階級 *classes sociales* の問題と端的に同一視することは危険である。R. ムーニエは、その「社会的階層の諸問題」の中で、三つの型の階層を区別することが必要であるとしている。すなわち、それらは「カスト *castes* としての階層、身分 *ordres* としての階層、階級 *classes* としての階層<sup>36)</sup>」である。

ムーニエによると、カストとしての階層は、インドにおいて完全に実現され、何よりも宗教的な清浄或は不浄(けがれ)の度合によって位階秩序がつけられる。それ故僧侶のカストが最高の地位を占めている。身分としての社会は、封建時代から18世紀にいたるヨーロッパにおいて実現された。そこでは、社会的な意見の同意によって、社会的職務に結びつけられた尊敬・名誉・権威に従って位階秩序がつけられる。そして軍事的社会が背景をなしているところから、それらの社会的評価は、軍職や支配或は保護の能力に結びつけられている。それ故軍人である貴族が、支配階層をなしている。最後に、階級としての階層について、ムーニエは言っている、「社会的位階秩序のさまざまな段階に個人を置くものが、物質的財の生産において演じた役割や、この役割によって獲得された金銭である場合に、市場経済の中に、社会的階級がある<sup>37)</sup>」。それはヨーロッパやアメリカにおいて19世紀に支配した階層の型である。諸階級は、それらの成員が市場に働きかける可能性に従って区別される。それ故、資本をもって市場で戦うことのできる階級、つまり企業家階級が最高の地位を

34) R. Mousnier, J.-P. Labatut, Y. Durand, *Problèmes de stratification sociale, Deux Cahiers de la Noblesse pour les États Généraux de 1649-1651*, Paris, P. U. F., 1965, p. 36.

35) Hubert Méthivier, *L'Ancien Régime*, Collection «Que Sais-Je?», Paris, P. U. F., 1964, p. 31. 井上堯裕訳『アンシアン・レジーム』白水社, p. 34.

36) R. Mousnier, *op. cit.*, p. 9.

37) *Ibid.*, p. 18.

獲得する。

ところで17世紀のフランス社会は、明らかに身分社会であるとムーニエは言っている<sup>38)</sup>。そしてたとえ仮に、商人やラブルールの水準では、商業資本主義の発展により、身分社会と抵触するような形成されつつある階級社会があったとしても、ブルジョワから成上がった法律家と剣の貴族との闘争は、いわゆる階級闘争 *lutte de classes* なのではなくして、むしろ身分闘争 *luttres d'ordres* である、としている<sup>39)</sup>。

身分社会の下にあっても階級闘争はあった。それは上層自営農民から析出された産業的中産者層を中核として、農民戦争或は宗教戦争という形で行なわれた。それにしてもかかる階級闘争の結果、封建的な身分制が打破されるには、いわゆる市民革命まで待たなければならなかった。市民革命以前の16～7世紀の過程において、上層農民→商人地主→官僚→法服の貴族という仕方での身分の上昇は、既存の社会体制全般の、従って封建的身分制そのものの、転覆をはかるという革命的な意味をもっていなかった。むしろ既存の社会体制——封建的身分制——の形式を温存させたまま、その内部での身分上昇の可能性をひらくことがいわゆる第三身分に属するものの基本的な願望であった。それ故かかる身分上昇は、旧体制下の支配と被支配との社会関係を変革するものではなかった。そのことからして、農民から成上って法服の貴族にまで到りついた者は、その出身身分の階級的利害から殆どまったく遊離して、かえって逆に、その出身身分であった農民層或は市民層を旧貴族層よりいっそう苛酷な仕方で搾取抑圧する者とさえなった。つまりこのような成上がり者の上昇転化が問題である。

以上のことを概括すれば、16～7世紀の身分社会の下では、上層農民→産業的中産者層（→産業資本家）の系譜と、上層農民→商人地主→法服の貴族の系譜との二つの上昇過程が重なり

合い、前者は階級闘争を結果して身分制社会にとって革命的な意義をもち、後者は身分闘争を結果して、むしろ身分制社会の形式的維持をはかった、と言えるであろう。われわれがここで主題とするのは後者の系譜であり、それが前者の系譜と封建的な旧身分社会との間でいかなる社会思想史的意義をもったかということである。

その前提としてわれわれは、16～7世紀のフランスの身分社会が具体的にどのようなものであったかを概観しておく必要がある。われわれはそれを、ムーニエが17世紀初頭のシャルル・ロワゾー Charles Loyseau の書物 (*Cinq livres du droit des offices, suivis du livre des Seigneuries et de celui des Ordres*, Paris, 1610) を紹介するところに従って見てみよう<sup>40)</sup>。

周知のように当時のフランスでは、聖職者 *le Clergé* と貴族 *la Noblesse* といわゆる第三身分 *le Tiers-État* という三つの身分が公式に分けられていた。これらの身分の各々は、さらに細かい位階秩序をもった副次的な諸身分に分けられた。すなわち、聖職者の身分内部の位階秩序は、上から、枢機卿、首座大司教、大司教、司教、司祭・助祭・副助祭の三つの上級聖品、侍祭・読師・被魔（ふつま）師・守門の四つの下級聖品、最後に剃髪式を受けた人、という順に下ってくる。

貴族の身分も、上から、王族、親王、君主からいっそう遠縁の親族、騎士 *Chevaliers* の高位貴族、公爵、侯爵、伯爵、男爵、城主、最後に武門であることを誇りとしている生まれの貴紳 *Gentilshommes de race* としての平貴族、という順で分けられる<sup>41)</sup>。

40) R. Mousnier, *Problèmes de Stratification Sociale*, p. 25 sqq.

41) もっとも、ユベール・メティヴィエによると、「16世紀には貴族内部の階層秩序は存在しなかった。あるのは、領地の豊かさによる区別だけである。爵位をもつ貴族（貴族の大多数は、楯持ち *écuyers* であった）が、階層秩序（といっても、世間上、慣習上のもので法的なものではない）をもつのは18世紀になってからのことで、王族の下にあっては、わずかにデューク、ことにデューク・エ・ペールが（王権により設けられ、特殊の特権を付与されていることのために）貴族全体の上に位したのみで

38) *Ibid.*, p. 25.

39) *Ibid.*, p. 36.



第三身分の中にさえ位階秩序があった。第三身分は司法官吏や財務官吏を含んでいた、たとえ彼らの中の若干の者が職務の貴族、頭職の貴族となったとしても。この身分の筆頭には、原則として、学者たち、すなわち神学部、法学部、医学部そして人文学部の博士、学士、大学入学資格者がいた。次いで弁護士、財務官、実務家の順で位置した。実務家には、長衣の人々、すなわち書記、公証人、代証人と、次いで短衣の人々、すなわち執達吏、競売物評価吏、売渡人がいた。その後に商人が来た。彼とともに、手の労働よりも商売の方にたずさわる製造業者たちが置かれた。以上の者たちはすべて、彼らが特権都市に住み、市の名誉やその特権に関与し、その会議に投票権をもっているならば、「ブルジョワ」という称号をもつことができた。商人の下には、商売よりも肉体労働にたずさわるすべての人々が来た。まず、ラブルール（富農）その下に職人が置かれた。職人の中では、親方、職人、徒弟という段階があった。そのさらに下に、賃金労働者或は日雇がいた。最後に、社会階級の最下層に、乞食や浮浪者が置かれた。

各身分は、着坐したり歩いたりする場合の優先権として、それぞれその席次をもっていた。この席次に、以上述べた諸身分の位階秩序が最も端的に表された。すなわち、第一の席次は聖職者、次いで貴族、最後に第三身分が来ることは言うまでもない。だがその場合、最下位の僧侶も、平貴族の最大の者よりも優先し、また最下位の貴紳も第三身分の最も富裕にして名誉ある者よりも優先しなければならない。「だが第三身分の成員が王の官吏である場合には、困難が生じた<sup>42)</sup>」。その場合、親王はいかなる官吏にも譲らない。<sup>ジュヴアリエ</sup>騎士や他の高位貴族の成員は、フランス大法官、國務顧問会議の顧問、最高法院の首長のような、その官職の故に騎士である官吏にしか譲らない。平貴族は、政府や司法の

長官である王の官吏には、たとえ彼が平民であっても、譲る。

席次の他にも、各身分は、例えばその衣服などにおいて各自の社会的象徴をもち、また敬称などのような各自の称号をもっていた。

諸身分はそれ自身として公権力や公的行政権をもつわけではないが、種々の特権をもっている。例えば、主要な軍職や王宮の官職の長などのようなある若干数の官職は、原則として貴紳のために取っておかれている。聖職禄としては、多くの司教座聖堂や多くの大修道院は、貴紳のために留保されたそれらの頭職、司教座聖堂参事会員、修道士の地位をもっていた。教会の中でも貴紳は優遇されていた。領主権についても、封土は貴紳のために留保されていた。平民は免除によってカフラン・フィエフと呼ばれる租税を国王に支払うことによってしかそれを獲得することができなかった。長衣の法官貴族を除いて、貴紳のみが剣を帯びる権利をもっていた。国家の防衛のために自分の生命をささげる貴紳は、ターイユ（人头税）や、戦争のために徴収される他のすべての賦課税を免除されていた。通常犯罪に対しては、貴紳は平民ほどきびしく罰せられないし、また鞭や縄のような名誉を傷つける体刑には決して処せられなかった。貴紳は決闘により侮辱の償いを得る特権を享けていた。貴紳は商業や手工業の利益の配分にあずかることができず、第三身分と張り合うことができなかった。そのため、第三身分は大きな一般的な特権から利益を得ていた。

このような厳格な身分制社会の下にあっても、身分は獲得されるし、また喪失される。聖職者の身分は、神に身を捧げることを公けに証しする剃髪式によって獲得される。貴族の身分は生れによるか王の文書によって得られる。あるいは王または自治都市の授爵する官職への就任などによって得られる。また何人も御用金裁判所の判決によって貴族の資格を認められる。もっともそれには一定の条件が必要とされたのであるが。第三身分が得られるのは、大学の学位を受けることによってか、さまざまな官職に就任

あって、他の貴族のもつ諸々の爵位(コント、マルキ等)は、政治的にも社会的にも殆ど無意味であった」(Hubert Méthivier, *L'Ancien Régime*, p. 20. 井上堯裕訳, p. 23).

42) Mousnier, *op. cit.*, p. 28.

することによってか、種々の司法裁判所の近くで弁護士または検事として登録されることによってか、手工業団体の中に入会を認められることによってである。

身分喪失に関しては、聖職者の身分の場合は、稀ではあるが、非行によって資格が剥奪される。顯職の貴族においては、非行は官職の剥奪を惹き起す。血統の貴族は大逆罪や叛逆の場合に喪失する。だが他の犯罪の場合には、貴紳の貴族身分を取消すまでにいたらず、ただそれを一時停止するだけである。というのは、「血統の貴族は『人間にとって本性的なものである』<sup>43)</sup>」のだから。それ故もし貴族の資格を失った貴紳が、再び貴族らしい生活を始めるならば、彼は王の名誉回復状を得られるし、王も決してそれを拒むことはない。貴紳はたとえかかる名誉回復状がなくとも、血統の権利、本性上の権利を失うことはない。

しかしながら、ロワゾーによって告げられたこうした身分の獲得および喪失の問題は、身分社会そのものの本質を変えるものではなく、まったく個々の特殊な例外にすぎない。もし身分の獲得および喪失が、かなり広汎な社会的規模で行なわれたならば、当然身分社会は危機に陥り、そこに社会的規模での身分闘争或はさらに階級闘争まで惹起されることになるであろう。ところで先に見たように、身分闘争は社会の内容にある局部的な変化をもたらすとしても、その形式に手を触れることはしない。階級闘争はこれに対して社会の内容のみならず形式をも変革しようとする。

16～7世紀のフランス社会においては、たんにまったく静態的な社会組織があったのではなく、たしかに社会的な可動性 *la mobilité sociale* も見られた。そのために深刻な社会問題も生じている。だがいったいどの程度の規模での可動性があったのだろうか。表面にあらわれた大きな出来事としては、領主財産の危機からする旧領主層の没落と新興領主層（商人地主）によ

る領主制の再編成、つまり領主層の交替、また宗教改革という表現をとった階級闘争があった。われわれはここではまず、前者の問題をとりあげ、その社会思想史的意義を明らかにしてみよう。

## V ユマニストの社会経済的基盤

——その上昇転化の過程——

14～5世紀における百年戦争や農民一揆の弾圧やさらに黒死病による大量死亡などによって、マルク・ブロックの言うようにフランスは「その再生力にまで打撃をうけた<sup>44)</sup>」のであった。その結果労働力が稀少価値となるとともに、農民の相継ぐ抗争によって、地代水準の傾向的低下と土地保有権の強化がもたらされた。しかも地代が金納化された場合には、地代の価値低落はさらに激しくなる。なぜなら地代は名目額で表示され、慣習法によって固定されていたために、貨幣価値の下落にともなって地代の価値も下落したからである<sup>45)</sup>。

さらに16世紀において新大陸貿易が活発化するとともに、莫大な量の低廉な銀がヨーロッパに流入した。その結果いわゆる価格革命 *price revolution* がひき起された。J. U. ネフによると、「価格——銀で計られた——は、ヨーロッパのさまざまな国において、1520年と1650年との間に、2倍から3倍以上にまで騰貴したと言われている。ひとびとが実際に支払った価格はまして騰貴した。なぜなら君主たちはいたるところで通貨を変造しつつあったから<sup>46)</sup>」。かか

44) Marc Bloch, *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*, tome 1<sup>er</sup>, nouvelle édition, Paris, Librairie Armand Colin, 1960, p.118. 河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』創文社, p.164.

45) たとえばマルク・ブロックは言っている、「1258年に1リーヴルをうけ取っていたある領主の子孫は、1465年にも、依然として同じ額をうけとりつづけた。ところが、1258年に祖先が、金の価値でいうとほぼ112フランをうけとっていたのに、1465年にその子孫は40フラン相当のもので満足しなければならなかった」(M. Bloch, *ibid.*, p.125. 訳, p.172).

46) J. U. Nef, "Prices and Industrial Capitalism in France and England, 1540-1640", in *Essays in Economic History*, Volume one, edited by E. M. Carus-Wilson, London, Edward Arnold, 1963, p.108.

43) *Ibid.*, p.31.

る価格革命は、ネフの見るように産業資本主義の進歩に寄与したかもしれない。一般的にあるいは大ざっぱに言えば、ジョージ・クラーク卿の言うように、「地主と農民の旧世界は、やってゆくことがいっそう難しいと感じた。商人や銀行業者はいっそう容易なものと感じた。そして資本主義は進歩した<sup>47)</sup>」。

このようにしてフランスにおいても、旧世界に属するいわゆる領主財産の危機 *crise des fortunes seigneuriales* は決定的なものとなった<sup>48)</sup>。そして新しい経済状況に適応できない旧貴族領主層は、没落の一途を辿り、その土地財産を手離すほかなかった。それはいったい誰の手に集積されていったのか。

まず「農民的土地所有<sup>49)</sup>」*propriété paysanne*の形態から見てゆこう。アンパール・ドゥ・ラ・トゥールはその「宗教改革の諸起源」において、「15世紀末に、われわれは二重の事実を認める。すなわち、農村階級の条件は高められ、都市のプロレタリアの条件は低減される<sup>50)</sup>」と言っている。なるほど先に述べたような理由から、農民は農奴身分から解放され、土地保有権を強化することができた。だがその結果、すべ

てまったく一様に彼らの条件が向上したわけではなかった。もっとも、クラークの言うように一様に農民の暮らし向きが困難となったわけでもないが。16世紀になると貨幣価値の下落は土地で生活する人々に深い影響を与えたが、そのため大きな損害を受けたのは日雇階級と領主階級とであって、生産者はほとんど被害をこうむらなかった、とマルク・ブロックは言っている<sup>51)</sup>。それにもかかわらず、生産者は、土地保有権の強化にとどまらない微妙でしかも深刻な影響を受けたことはたしかである。

実際、土地保有権の強化と貨幣経済の浸透は、土地売買を促進し、そこから農民間の保有規模の不均衡性つまり農民の階層分化が結果した。すなわち農民層はまず独立自営農民層と生産手段を失った貧農層とに両極分解し、さらに独立自営農民層は、経営型富農層と地主型農民とに分解する<sup>52)</sup>。周知のように、イギリスにおいては、農村の毛織物工業が推進の原動力となって、経営型富農層が一般的に展開し、独立自営農民層が近代資本主義の生みの親となっていくた。ところがフランスの場合、商業革命において主役を演じた農村の毛織物工業は殆ど見るべき発展を示さず、輸出どころか自国内消費のためにイギリス、オランダなどから輸入せねばならない状態であった<sup>53)</sup>。しかも穀物などの自然的産物を除いては、国民的規模での大量の市場向け生産物をもたず、したがって経営型富農層の展

47) Sir George Clark, *Early Modern Europe from about 1450 to about 1720*, New York, Oxford University Press, 1960, p.120.

48) 二宮宏之氏によると、「十六世紀に入るならば、北部フランス、とくに南ネーデルランドに連るフランドル、アルトワ、ピカルディ等を中心にして、地代の金納化は一層進展するであろう。しかもこれと並んで、貨幣価値の下落も一層顕著となり、ラヴォーによれば名目貨幣であるリーヴルの購買力は、十六世紀の間にその五分の四近くを失ってしまったという。かくては保有地に課せられる封建地代も、貨幣形態に転化していた限り、殆ど無視されるほどになり、自らの保有地が如何なる領主に属しているか不明になるような事態すら、しばしば見られるに至るのである」(二宮宏之「領主制の『危機』と半封建的土地所有の形成」((大塚、高橋、松田編『西洋経済史講座』第IV第三部、封建制から資本主義への移行(一)、岩波書店、昭和35年)) p.89)。

49) ここで「農民的土地所有」というのは、依然として領主に対して封建地代義務を負うけれども、相続および譲渡可能な農民による土地所有の形態を指している。Cf. 高橋幸八郎『近代社会成立史編——欧洲経済史研究——』御茶の水書房、昭和28年、p.88.

50) P. Imbart de la Tour, *Les Origines de la Réforme*, Tome I, Deuxième édition, Melun, Librairie D'Argeries, 1948, p.464.

51) Marc Bloch, *op. cit.*, p.127. 訳, pp.174-175.

52) こうした土地売買に基づく農民層分解によって、次の三つの階層が生まれたと柴田三千雄氏は言っている。(1)「近隣農民の保有地を入手しながら経営を拡大して商品生産を行なう富農層」、(2)「土地を失いつつ『腕の農民』(laboureur à bras)へと転落してゆく貧農層」、(3)「他人に貸与するための土地集積、すなわち地主の発生」がそれである(柴田三千雄『フランス絶対王政論』御茶の水書房、1960年、pp.42-43)。

53) たとえば17世紀のコレベルが、いわゆる特権マニュファクチュールによって毛織物工業育成政策をとるにいたったのは、吉田静一氏の言うように「当時のフランスの毛織物産業はきわめて微弱であり、輸出どころか、却って自国内消費のためにイギリス、オランダの毛織物を大量に輸入するといった状態であった」というような状況の自覚のうえに立つものであった(吉田静一『フランス重商主義論』未来社、1962年、p.24)。

開の含蓄的条件を欠いたために、フランスの富農層は寄生地主的傾斜を示すようになった。

例えば、ピエール・グーベールがボヴェジ州について描いているように、富農 *laboureur* (その数は比較的少かったが) は、売るべき剰余作物をもっていたので、穀物の価格が騰貴すると、それらを売ってかなりの利益を得た。このようにして富裕になると彼らは、小農の中の彼らの債務者から土地を買い占めた<sup>54)</sup>。またしばしば近隣の小貴族などに高利で金を貸し、彼らを破滅させた<sup>55)</sup>。そして彼らの多くは、教会などの大所領を借地して、領主の収税人となり、17世紀末までにはその閉ざされたカストを構成した。

他方、遠隔地商業から局地市場の形成へと商品経済が展開するにともない、また絶えざる戦争による軍備資金の必要(制約の多い封建家臣よりも、むしろ傭兵隊を用いることが一般化してきた)から、領主階級は貨幣経済に巻きこまれつつも、その唯一の収入源であった地代は低減する一方であった。そのため領主は商人=高利貸から借財を重ねた。領主層はそのいわゆる貨幣欠乏から免れるために、農奴解放を上から利用し、農民から解放金を半強制的に取上げた。つまり「マンモルト農民はその自由を買わなければならなかった<sup>56)</sup>」。ところがこれまた貨幣欠乏の下にあった農民は、領主によって課せられた解放金を得るために、止むを得ず土地を代償として商人から借金をした。つまり商人は領主にも農民にも寄生することによって産をなした。そして商人がその高利の前貸を通じて得たものは、何よりも土地であった。このような商人による土地集積が、いわゆる「市民的土地所有」*propriété bourgeoise* の範疇を形づくる<sup>57)</sup>。

しかし「市民的土地所有」と言っても、土地

の上級所有権が依然として領主にあり、現実の所有者がなお「保有地地主」である限り、未だ近代的土地所有を意味するものではない<sup>58)</sup>。つまり「市民的土地所有」の発生的担い手は、すでに見た地主型富農層なのである。そしてこの地主層は、何よりも土地財産の集積によって商人=市民へと成上がったのである<sup>59)</sup>。また都市の「ブルジョワ」商人も同様に高利貸機能を行なうことによって土地集積を進展させた<sup>60)</sup>。穀物を除いては国民的規模における市場向け生産物をもたないことから結果したこのような前期的資本による土地集積という前近代的利潤追求は、たしかに旧領主制を外側から分解しはしたが、再びそれ自ら新しい領主制を形成し、結局絶対王制の基盤をなすにいたった。

アンバール・ドゥ・ラ・トゥールは、15世紀末に、二つの事実がその歴史を特徴づけているとしている。一方ではブルジョワジーの中に差別が目立ってくる。他方では、「ブルジョワジーと庶民との間の距りは広がってゆき、ブルジ

58) 「イギリスやフランスでは、地主制が成立した後においても旧荘園領主の領主権は否定されることなく、ひきつづいて残っていたのである。従って、寄生地主はいぜんとして『土地保有者』であり、僅かな額であるとはいえマナー領主に対して地代を支払わねばならず、また領主権に服さなければならなかった」(吉岡昭彦『地主制の形成——絶対王制の基盤——』創元社、1957年、p.112)。

59) 二宮宏之氏はこの地主型農民について次のように言っている。「『再建』期を通じて土地所有の拡大に営みの中心を置いたこの層は、獲得した土地を近隣の貧農に小作させ、自らの経営規模は縮減して行くが、更に、穀物の買占めによって市場を支配し、高利貸機能を兼ね行なうことによって、一層のことその地主的性格を強めて行った。高率小作料の収奪と共に、彼はまた、封建地代の徴収請負などを通じて領主制機構に結びつき、しばしば『村の顔役』*coq de village* となって、その特権的地位を固めている。こうして農村に足場を固めた彼らは、やがて農村の枠を超え、脱農化しつつ、商人となり市民となって行くであろう」(二宮宏之「領主制の『危機』と半封建的土地所有の形成」前掲書、p.97)。

60) その理由について柴田三千雄氏は、「当時の貨幣獲得の最も有利な場が生産自体の内部ではなく、その外部にあったという点を指摘しておくに止めたい。領主制が後退して生産の主導性が直接生産者の側に移り、しかもその内部に小規模な生産様式に固執しながら貨幣需要に渴する貧農層が発生しつつある時、『商人』として、あるいは直接的に『貸付提供者』として貧農層を外側から圧迫することが最も利潤多き営みとなった」(柴田三千雄『フランス絶対王政論』p.51)。

54) Pierre Gouberts, "The French Peasantry of the Seventeenth Century: a Regional Example", in *Crisis in Europe 1560-1660, Essays from Past and Present*, London, Routledge & Kegan Paul, 1965, p.163.

55) *Ibid.*, p.153.

56) Imbart de la Tour, *Les Origines de la Réforme*, tome I, p.466.

57) Cf. 高橋幸八郎『近代社会成立史論』pp.102-103.

ジョワジーと貴族との間の距りは接近してゆく。それは、政治力と同様経済力がブルジョワジーの掌中に集中するからである。絶対君主制と資本主義との到来は、ブルジョワジーの到来を示している<sup>61)</sup>」。

つまりこの時代の土地集積は、ラブルール(富農)→ブルジョワ地主→新興領主という仕方で上昇転化してゆく階層が中核となって行なったのであり、その場合の土地集積の手段は何よりも前期資本の媒介によるものであった<sup>62)</sup>。

それ故、領主財産の危機の際における「領主的土地所有」*propriété seigneuriale* は、動態的に把握されなければならない。それは一つには旧貴族の没落の過程を含むとともに、他方農民からブルジョワ貴族への上昇転化の過程をも含んでいた。

ところでブルジョワが貴族身分となるためには、絶対王制期に独特の売官制 *vénalité* によって官職 *office* を買わねばならなかった。売官制が生れたのは、中央集権を目ざす国王の財政上の必要と、勢力およびより以上の財産を望むブルジョワの願望との一致からであった<sup>63)</sup>。

ユベール・メティヴィエは言っている、「ルイ12世は、イタリアのある国にならって、財務官職を売った。ついで、彼の後継者たちは、そこに利益を求めて、実施を司法官職にまで拡大し、さらに、あらゆる種類の官職を創設するようになった。それは、統治を強めるためというよりも、とくに1552年以後は臨時収入局——ロワゾーの言葉をかりれば(官職という)この商品の店>と化した——の収入を殖やすためであった<sup>64)</sup>」。

実際、ブルジョワが官職を買うのは、勢力と財産とをそれによって手に入れるためであった。このようにして彼らは会計方と法律家とになった。財務管理は廉潔なものではなかった。不当な税の取り立てがしばしば行なわれた。中央権力は余りに遠かった。そのため有能な人間ならば公金横領はまったく容易であった。そしてそれはかなりの規模で行なわれた。それ故にアンバール・ドゥ・ラ・トゥールは言っている、「これらの官職が求められることと、そしてその官職を占める本官が財産を作った後隠退し、襲職権あるいは(他人を公職につかせるための)辞任によって、この利益のある世襲財産を身内の者に譲り渡そうと試みるのが、よく分る<sup>65)</sup>」。

ともかく当時のブルジョワの理想は、王の役人となることであった。そして自分が役職につけない場合には、その子供たちを官吏に仕立てあげようとした。そのためブルジョワは競ってその子供たちに教育を受けさせようとした。このようにして全フランスに、法律にたずさわる実務家 *praticiens* と呼ばれる階級が現れたが、それはとりもなおさず知識人の階級であった<sup>66)</sup>。貴族や高位聖職者、そして何よりも国王が彼ら

61) Imbart de la Tour, *op. cit.*, p.415.

62) マルク・ブロックは、17・8世紀の土地台帳から「例外的に広い耕地の幸運な所有者の称号と資格」を尋ねて、次の四つの場合をあげている。「領主 *seigneur* (もっともひんぱんである)、——大ていは官職貴族であって、さらに半ばブルジョワ化した近郷の豪士 *gentilhomme*、——一つの都市あるいは近隣の田舎町のブルジョワ、すなわち商人、小官吏、法律家、一言でいえば『旦那』*Monsieur* (土地台帳は、一般的に、きわめて注意深く、農村の仕事以上の地位の人にしかこの名誉ある呼び名を認めなかった)、——時には、しかしより稀でしかなかったが、単なるラブルール、かれは、すでにかなりの農地所有者であったが、またしばしば明らかに、農業という固有の職業のほかに、金融業者、商人、居酒屋という仕事にもたずさわっており、居酒屋にはふつう、儲けは多いが公言をはばかる週貸しの金貸しという職業がつけ加っていた。ともあれ、これらすべての社会的範疇は、しばしば、同じ上り口の諸段階であるにすぎない。富裕な農民は旦那方の前身であろうし、後者は、おそらく豪士の前身であろう。15世紀末以降、土地の最初の集積者は、とくに村もしくは田舎町の小資本家——商人、公証人、高利貸——のなかから出ていた」(M. Bloch, *Les caractères originaux*……, I, p.142.訳, pp.191-192.)

63) 柴田三千雄氏によれば、「もともと<sup>オフイス</sup>官職とは、中央集権を志向する初期絶対王制によって、一方では分権的な

封建貴族への対抗物として、同時に他方では国庫収入の一手段として権力機構の中に定着させられた制度であったが、それが伴う売官制(*vénalité*)と世襲制とは『ブルジョワ』に初期絶対王政の藩屏として行政・財政・司法の各分野に進出する機会を与えた」(柴田三千雄『フランス絶対王政論』, p.55)。

64) Hubert Méthivier, *L'Ancien Régime*, p.51. 訳, pp.55-56.

65) Imbart de la Tour, *op. cit.*, p.444.

66) *Ibid.*, p.451.

の知識能力を必要とした。強力になった彼らは、都市においては政治に参加することを求め、田舎においては裁判の仕事にたずさわるようになった。いまや司法官の職は彼らの独占するところとなり、官職は殆ど彼らの手中に握られるようになった。そして官職は一つの相続財産となって世襲されるようになった。すなわち、「法服」robe は一つの身分となったのである。ひとは司法官を「第四身分」quatrième état と呼んだ。

しかし第四身分は未だ第二身分すなわち貴族ではない。その財産とその職務において貴族に極めて近いブルジョワは、あらゆる手段を弄して貴族身分に入りこもうとした。アンバール・ドゥ・ラ・トゥールは、かかる割込みの形態を次のように分類している。

「第一の形態は、土地の所有である<sup>67)</sup>」。14世紀以来、古い桎梏は消失し始め、課税の免除された自由封地が少しずつ全フランスにひろがった。そして平民による封土の取得が行なわれた。すなわち、全フランスにおいてブルジョワは、予め許可を受けることも金を支払うこともなく、貴紳の土地を獲得することができた。それとともにブルジョワは貴族と自称し、封建的課税から免れようとした。このようにして多くの商人たちは、特権的地位の中にすべりこんだ。

「第二の手段は、自治都市のある若干の賦課租に結びついた貴族叙任である<sup>68)</sup>」。それは、シャルル7世やルイ11世などの絶対主義の創建者たちが、ブルジョワ的貴族政治を奨励し、その虚栄心におもねることによってその忠誠を確保しようとしたことによる。このようにして市の重だった役人は、封建的課税から免れて貴族に列せられた。しかも彼らの特権は、たんに一個人のものではなく、世襲的なものとなった。

第三は、「国王によって与えられた貴族叙任<sup>69)</sup>」である。この時代ほど数多くまたしばし

ば貴族叙任が行なわれたことはなかった。それは、特権を拡げること、この時代ほど国王が政治的および財政的な意味で大きな利害をもったことがなかったからである。つまり国王とブルジョワとの政治的および経済的な結びつきが問題である。そしてこの新しい貴族は、大部分王の封臣となり、とりわけ司法官職の中に補充された。

このようなブルジョワによる貴族身分への侵入の社会的結果は何であったか。まずそれによって貴族階級が再編成された。そしていまや成上がったブルジョワ貴族は、一面において旧領主層の財産危機に乗じて金融=高利貸付とその司法官職を利用して広大な土地を集積し、かくして旧領主制を浸蝕するとともに、また反面、マルク・ブロックの表現を借りれば、「資本家の精神」をもって領主制機構の救済に全力を傾けたのである<sup>70)</sup>。

領主制のこの再編成はかえって領主権の拡大強化をもたらしたことから、「封建反動」réaction féodale と呼ばれている<sup>71)</sup>。新興ブルジョワ貴族によるこうした「領主制の再生」のための試みは、新たに保有地地主が抬頭する可能性をつみとっていった<sup>72)</sup>。アンバール・ドゥ・

70) M. Bloch, *Les caractères originaux*……, pp. 130–131. 訳, p. 178.

71) それをマルク・ブロックは次のように要約している、「領主は領主特権放牧、『エルブ・モルト』herbe morteによって、牧畜の形態で、土地利潤の直接的分け前をとろうと努めた。かれは同じ目的を直営地の再建によって、より一層有効に達成したのである」(*Ibid.*, p. 140. 訳, p. 189)。

さらにそれに注釈を加えれば、新興ブルジョワ貴族は、まず領主権を行使することにより、共有地また保有地をも犠牲にして無主地を保留地に統合し、地代滞納を口実にして保有地を没収し、或は高利貸付を通じての買収によって直営地を再建拡大した。このようにして得た直領地を小作地に転化して、農民に高率地代支払義務を負わせて貸し与えた。つまり領主は私的地主化し、いわゆる直領地地主となった。さらに新領主は土地台帳の改訂を行ない、領主権承認を農民に強制し、その拡大をはかり、附加的年貢まで新たに設けた。また貨幣価値の低落から免れるために、生産物地代の復活を行なった。

72) 「再生の推進者は保有地地主から上昇してきた新領主層に外ならないが、彼らは領主の座につくや否や、自己の発生基盤を抑圧する役割に転ずるのである」(柴田三千雄『フランス絶対王政論』p. 59)。

67) *Ibid.*, p. 456.

68) *Ibid.*, p. 457.

69) *Ibid.*, p. 458.

ラ・トゥールは言っている、「もし彼らが貴紳となることを熱望したとするならば、それは国家に尽すためではなくして、彼らの出身である庶民から別れるためであった<sup>73)</sup>」。そのときから彼らは法体系によってバック・アップされて政治的反動化をあらわに示すようになる。

ブルジョワから新領主となり、売官制によって官職ブルジョワジーことに高等法院官僚 *Parlementaires* となる過程を通じて、領主世界へかって見られなかったほど大量に流入して形成されたカストも、17世紀にはなかば閉ざされた<sup>74)</sup>。中木康夫氏によると「こうした商人出身の高等法院官僚は、相互に姻戚関係を展開しつつ、16世紀後半以降ようやくカスト化（官僚・地主閥形成）を開始するにいたる。……そしてそのため、この頃から一般商人にとってパルルマンテールへの上昇がようやく困難となり、ここに不満派の中小官職保有者層がリーグ派へ参加する基盤が形成される<sup>75)</sup>」。それは宗教戦争の階級性格を複雑なものたらしめ、フランス宗教改革挫折の一因ともなった。そして17世紀以降になると、高等法院官僚は第二身分（貴族）へ移行し、旧貴族と混交して絶対王制の政治的中核をなすにいたる。

16世紀から17世紀にいたるユマニストの階級の基盤は、実にこのように、農民→ブルジョワ地主→官職保有者という仕方で上昇転化した階層であった。彼らは何よりも前期的資本を通じて土地集積を行なった半封建的寄生地主階級あるいはその子弟であった。彼らが学問を修めたのは、それによって勢力と特権とを得、自己の出身身分から脱け出して、さらに上層の身分へ、ついには貴族身分へと上昇するためであった。つまり学問が彼らの立身出世を約束したからである。だが生まれの貴族すなわち剣の貴族（貴

紳 *gentilhomme*）が彼らの障害となった。そのために、貴紳による封建的割拠主義を打破して君主制的統一をはかろうとしていた王権と結び、その司法官僚となることによって、彼らはその障害を克服しようと試みた。実際、宗教戦争に際しては、彼らは「ブルボン絶対王制成立の直接の階級的支柱<sup>76)</sup>」としてそれと運命を共にする。つまり、彼らは政治的、経済的、さらには文化的にも、絶対王制の支柱となっていた。すなわち、啓蒙専制君主とその官僚軍の教化育成が、ユマニストの現実的な使命であった。

## VI ブルジョワ貴族のイデオロギー

すでに見たように、ユマニストとデカルトとは、共通してブルジョワ地主層を出身母胎としていた。この階層は売官制によって官職ブルジョワジーとなり、さらに法服の貴族へと昇進した。だがブルジョワ地主における富と権勢とを求めたこの上昇過程は、決していわゆるブルジョワ革命そのものをもたらしはしなかった。むしろこの社会階層は上昇転化した結果、その出身身分を裏切って領主制反動を強化した。そうした社会経済史的基盤に立ちながら、商人的な知的能力によって成上がったこの社会階層は、どのような社会思想史的役割を果たしたであろうか。それはいかなる価値理念また世界観を形成したのであろうか。

以上述べてきたことからして、デカルトの世界観は「本質的に、上昇期の自由主義的なブルジョワジーの世界観である。……この角度からすれば『方法序説』は、歴史家には、それから200年あまりのちに、産業プロレタリアートの理論的・政治的上昇期の端緒となるべきであったかの宣言（共産党宣言）にも比せられる宣言とみられるのである<sup>77)</sup>」というアンリ・ルフェーヴルの見解は、かなり問題があるということがあらわになってきたであろう。つまり彼は、16～7世紀におけるブルジョワジーの概念と、18世紀末のいわゆるブルジョワ革命におけるブ

73) Imbart de la Tour, *op. cit.*, p. 461.

74) M. Bloch, *Les caractères originaux*……, p. 130. 訳, p. 177.

75) 中木康夫『フランス絶対王制の構造』未来社、1963年、p. 75、(註) 4.

76) 同上, p. 74.

77) Henri Lefebvre, *Descartes*, p. 37. 訳, p. 26.

ルジョワジーの概念とを、無批判的に混同しているのである。それら二つの社会階層は、むしろブルジョワ革命において敵対的關係に立つにいたったのだが。それ故まずブルジョワジーの概念規定から始めなければならない。

「ブルジョワ」bourgeois という言葉は、実際かなり多義的である。その語源から見ると、都市の住民殊に商人を意味したことは確かであろう<sup>78)</sup>。アンリ・ピレンヌによれば、「市民階級 bourgeoisie もまた商業復活の創出物にすぎず、最初には、商人 mercator という語と市民 burgensis という語とは同義語として使用されていた<sup>79)</sup>」。ところが現代では、殊にわが国においては、ブルジョワジーは近代的資本家、しかも主として産業資本家の同義語とされている<sup>80)</sup>。もしかかる現代的解釈をもってするなら

ば、少くとも 16～7 世紀における「ブルジョワジー」という用語を理解することはできない。従ってブルジョワ地主とかブルジョワ貴族というような概念にしても、ましてブルジョワ地主と産業的中産者層との闘争というような事態にしても、理解を超えた問題となる。

「ブルジョワ」という言葉のこのような多義性に対して、その言葉は 16～7 世紀においては、一つのしかもきわめて注目すべき意味をもっていた、とローラン・ムーニエは言っている。すなわち、「ブルジョワとは、高貴に、その地代で、職業も商売も営むことなく、生活しており、しかも『これこれの都市のブルジョワ』という資格での権利をもち、その名誉やその特権に参与し、その議会において投票権をもち、場合によっては、市の行政官となることもある、そうした都市の住民としての平民である。かかるブルジョワは、物財の生産に参与する資本主義的企業家という社会的グループではまったくない<sup>81)</sup>」。つまり、貴紳 gentilshommes が輕蔑的に「ブルジョワ」とか「ブルジョワジー」と呼んだ言葉は、なお身分社会的な意味から脱け出ていなかったのである。

このようにして 16～7 世紀におけるフランスの「ブルジョワジー」とは、何よりも寄生的な商人地主層を意味した。そして彼らは表向き商売を営む代りに次第に官職を買って、それからあがる収益によって土地集積を拡大し、貴族にまで成上った。デカルトがこのような社会身分に属する限り、彼の世界観がその意味でのブルジョワジーの世界観であることは自然なことであろう。だがそのために、『方法序説』が 18 世紀末のいわゆるブルジョワ革命を予示する宣言であった、ということは見当外れである。な

78) 例えばアンリ・ピレンヌによれば、その語源は、遠隔地商人たちが、その遍歴の途路において遭遇すべきあらゆる種類の危険から保護を求めるのに、「城塞」bourg を利用したことによると言われている (Henri Pirenne, *Histoire, Économique et Sociale du Moyen Age*, édition revue et mise à jour avec une annexe bibliographique et critique par H. Van Werveke, Paris, P.U.F., 1963, p.36. 増田四郎、他訳『中世ヨーロッパ経済史』一条書店、昭和35年、p.54)。ハンス・ブラーニッツもその説を継承している (Hans Planitz, *Kaufmannsgilde und städtische Eidgenossenschaft in niederfränkischen Städten im 11. und 12. Jahrhundert*, 1940. 鯖田豊之訳『中世都市成立論』未来社、1959年、pp.24, 34-35)。

だがこの説明はもはやまったく満足を与えるものではなくなっていると、H. Van Werveke によって批判がなされた (H. Pirenne, *op. cit.*, critique par H. Van Werveke, p.191)。彼によると、burg というゲルマンの言葉は、もともと初めは、城塞化されていない小定住地を意味した。それはゲルマン民族の侵入の後ゴールに伝えられ、10～11世紀の間にゴールとイタリア全体にひろまった。いまやそれは主として大修道院や都市の郊外の周囲に形づくられた人口集団を指すようになった。こうした言外の意味が、burgensis (市民) すなわち burgus の住民という意味を定めたのであり、次いで bourgeois という意味を定めたのである。burgus という言葉が城塞の意味をもつようになったのは、6～7世紀におけるドイツにおいてであった。12世紀の初めになって始めて、ラテン諸国において保持されたその言葉の意味が、ドイツにおいても採られるようになった (H. Van Werveke, "The Rise of Towns", in *The Cambridge Economic History of Europe*, vol. III, chap. I, VI, Cambridge, 1963, p.15.)。

79) Henri Pirenne, *Histoire Économique et Sociale du Moyen Age*, pp.41-42. 訳, p.62.

80) 例えば岩波小辞典の『経済学』における「ブルジョアジー」の項目を見ると、「ブルジョアジーとは、近代的資本家すなわち社会的生産の諸手段の所有者と賃労働者の雇用者の階級を意味する。かれらは近代的賃労働者の階級たるプロレタリアートとともに、資本主義社会における二大階級をなしている。……」(都留重人編『経済学』岩波小辞典、1958年、p.169)とある。

81) R. Mousnier, *Problèmes de stratification sociale*, pp.41-42.



ぜなら、16～7世紀におけるブルジョワジーの概念と、18世紀末におけるブルジョワジーの概念とは、質的にかなり相違していたと思われるから。つまり、いわゆるブルジョワ革命の中核をなしたのは、産業的中産者層 *gewerblicher Mittelstand* であって、寄生的な商人地主層ではなかった。

もちろん16～7世紀にも産業的中産者層の芽生えはあった。彼らは宗教戦争において、ユグノーと呼ばれたカルヴァン派ブルジョワジーの中核をなしていた。しかしすでに見たように、彼らはイギリスにおけるほど一般的に展開せず、そのため宗教戦争は直ちに市民革命をひき起すにいたらなかった。そしてデカルトは決してこのようなカルヴァン派ブルジョワジーの革命的宣言を行なったわけではなかった。それは彼がオランダにおいてプロテスタントと交りながらも、終生カトリックにとどまり、そのためついにオランダのプロテスタント派の神学者ヴォエティウス *Gisbertus Voetius* やレヴィウス *Revius* などによって法王主義者或は無神論者として非難攻撃されたことからして明らかである。そうしてみると、ルフェーヴルのデカルト解釈は、その土台からして崩壊するほかない。

もっとも例えばボルケナウのように、「カルヴァン派ブルジョワジーは、フランスでは純然たる防禦以上の試みをあえて行なうことができない。だから、あたらしい資本主義的生活形態のための闘争のイデオロギー的指導は、フランスでは、もっぱらかの『ジェントリー』——すなわち、当時のすべての資本主義国においてきわめて重要な、別の階層——の役割となる<sup>82)</sup>」という見解もある。そして彼はその「ジェントリー」の中にデカルトをも含めている<sup>83)</sup>。彼のジェントリーの定義は、要するにわれわれがすでに述べた「ブルジョワ貴族」のことにほかな

らない<sup>84)</sup>。

ボルケナウの見方によると、ジェントリーは、殊にそのイデオロギー的面に関して、フランスにおいてこそその固有の役割を十分発揮することになる。ところがリチャード・ヘンリー・トニーは、その「ジェントリーの勃興」の中で、イギリスにおける商人地主である「企業家的な農村ジェントリー<sup>85)</sup>」について論究し、かかる社会階層はイギリスにおいてこそ十分展開しえたことを述べている。フランスとイギリスとにおけるこの差異の問題は、微妙な問題である。

トニーによると、「ジェントリー自身も、フランスにおけるように商売に手をだせば貴族身分を剥奪されるというような規則にはしばられていないので、どんなところから補助収入をえてもよく、そうかといってまた、オランダの場合のように農村からすつかり足を洗ってしまったわけでもなく、農村の代表者として不可欠な地方的民衆的なつながりと、小貴族としての貴族的風格とをあわせもち、しかも巧みな冷酷なリアリズムで次々にカードをきっていくのである<sup>86)</sup>」。

たしかにフランスの場合、商人やあらゆる手工業の職人のような行ないをすること、要するに儲けるための行ないは、貴族身分に違背することとされた<sup>87)</sup>。しかしフランスではブルジョ

84) 「わたしが『ジェントリー』とよぶのは、その社会的勢力がその資本力にもとづいてはいるものの、同時に身分的特権をもち、その資本主義的ならびに封建的活動能力の結合によって、政治の運用を多かれ少かれ独占している（このことはもちろん、この層がそのために必然的に独裁的階級となる、ということの意味しない）、一つの階層のことである。ジェントリーというものは、市民層の貴族化によっても、貴族層の市民化によっても、あるいはまた市民層と貴族層の結合によっても成立することができる。それは封建的狀態から資本主義的狀態への過渡期にのみ生ずるものであるが、そこではしかし、非常な規則性をもって生ずるのである」（同上、訳、I, p.220）。

85) R.H.Tauney, "The Rise of the Gentry" (1941) in *Essays in Economic History*, vol. I, ed. E.M.Carus-Wilson, London, Edward Arnold, 1963, p.186, 浜林正夫訳『ジェントリーの勃興』未来社、1957年、p.36。

86) *Ibid.*, pp.174-175. 訳、p.11。

87) 「なぜなら、貴族身分の特性は、その地代で暮らすことであり、或は少なくとも、いささかもその労苦を売らないことであるのだが、かかる貴族身分に違背するもの

82) Franz Borkenau, *Der Übergang vom feudalen zum bürgerlichen Weltbild. Studien zur Geschichte der Philosophie der Manufakturperiode*, Paris, Félix Alcan, 1934. 水田洋他訳『封建の世界像から近代の世界像へ』I, みすず書房、昭和36年、pp.219-220。

83) 同上訳、II, p.4。

ワ貴族までが生まれの貴族のかかる古い掟に従い、商人の足を洗って官職保有者に転化したのに対し、イギリスではジェントリーがまさに商売によって新しい貴族になり上がっていったということは、ただたんに法的な問題にとどまらず、フランスとイギリスとの社会経済的基盤の相違から来ているものと思われる。「商売をやって儲けよう」ということがイギリスの多くの地主たちによって言われたということは、「イギリスの農業の背景をなしていたのが、全国的にひろがりつつある産業化のなかで、ますます個人主義化しつつあった商業社会」であったからであり、したがって「商売は好景気」であったからである<sup>88)</sup>。

要するに、イギリスでは産業的中産者層の発展が、ジェントリー層をも企業的たらしめたのであり、これに対してフランスでは産業的中産者層の相対的未成熟が、ブルジョワ地主をもっぱら官職保有による土地集積へかりたてた、と恐らく言うことができるであろう。いずれの場合も、産業的中産者層が問題の鍵を握っていたと思われる。

それ故、カルヴァン派ブルジョワジー——産業的中産者層が中核をなしていた——がなしとげることのできなかつた「あたらしい資本主義的生活形態のための闘争」を、フランスの「ジェントリー」すなわち法服の貴族が遂行したというボルケナウの見解は、明らかに誇張である。ボルケナウ自身も、「法服貴族はブルジョワジーの第一線の戦士ではあるが、同時に資本主義的世界での異邦人である<sup>89)</sup>」と言って、ジェントリーがパラドクサルな階層であったことを意識してはいた。

実際、16～7世紀における社会階層の決定的対立は、産業的中産者層を中核とした農民層と封建的領主層との間にあったのであって、商人地主がそのいずれにつくかは、そのつどの彼ら

の政治的経済的利害に依存していた。そしてその利害を左右した要因は、農民的商品経済の展開の程度、言いかえればその担い手であった産業的中産者層の力関係であった。

農民的商品経済＝産業的中産者層が顕著に展開したイギリスでは、商人地主層は資本家的傾斜を示し（いわゆるジェントリーの資本<sup>90)</sup>）、産業的中産者層と共同して市民革命を成就した。反対に農民的商品経済＝産業的中産者層の展開が未成熟な場合は、商人地主はむしろ領主制反動を強化することから利益を引出そうとする。つまり商品経済の主導権は領主によって握られる。その顕著な場合は、例えばエルベ河以東の地方に見られた「農場領主制」Gutsherrschaftの形成となる。そこでは商人が貴族化するというよりもむしろ貴族が商人化する。それ故商人地主がその固有の機能を発揮して典型的に展開するのは、農民的商品経済が或る程度展開しているながら、旧封建領主勢力と産業的中産者層を中核とした革新勢力との均衡が保たれているような地方、つまり16世紀から18世紀にいたるフランスであった。

周知のようにエンゲルスは、その『家族・私有財産及び国家の起源』の中で、いわゆる階級国家論について述べながら、「しかしながら例外的には、相闘争する諸階級が互に殆ど均衡を保って、国家権力が外観上の調停者として一時両者に対して或る程度の独立性を得るが如き時期が現われる。貴族と市民階級とを互に平衡させた、17、8世紀の絶対王制がそれである<sup>91)</sup>」と言っている。そして相闘争する二階級の外観上の調停者としての機能を実質的に担った者は、絶対王制の官僚軍を構成したブルジョワ地主層であった。それ故、寄生的なブルジョワ地主が最も典型的に展開したフランスが、同時に絶対王制の最も典型的な展開を見たのである。

ば、いやしく下劣な儲けであるから」とシャルル・ロワゾー Charles Loyseau も言っている (R. Mousnier, *Problèmes de stratification sociale*, p. 32)。

88) R.H. Tawney, *op. cit.*, p. 184, 訳, pp. 32-33.

89) ボルケナウ『封建的世界像から近代的世界像へ』訳, I, p. 225.

90) 角山栄『イギリス絶対主義の構造』ミネルヴァ書房, 昭和33年, 前編第3章第4節, 参照。

91) Engels, *Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats*, 1884, Berlin, Dietz, 1953, S. 171. 西雅雄訳『家族・私有財産及び国家の起源』岩波文庫, 改訳版, 昭和33年, p. 227.

このようにしてブルジョワ貴族のイデオロギーは、相闘争する諸階級のイデオロギーの外観上の調停をはかるものとして、さしあたり両者に対してある程度の独立性をもっているかのような客観的立場を表明する。その故それは、相闘争する諸階級の利害のプロパガンダの代りに、「無関心な傍観者」としての外観を保って裁判官的役割を引き受け、知識階級として反省的客観的な学問を志向するにいたる。

実際、ヘーゲルはその「法の哲学」において、「普遍的な国家的利益や法律的なものをこれら特殊の権利のうちに確保し、特殊の権利を普遍的国家利益に帰着せしめるためには、統治権の代行者たる行政官吏およびさらに高次の諮問府、そのかぎりにおいて、君主直属の最高機関に統一されるところの、合議制的に組織された官府が必要である<sup>92)</sup>」とし、また「政府構成員および官吏が中間階層 *Mittelstand* の主要部分を構成し、国民大衆の教養ある知性と法律意識とはこの階層に帰属する。この階層が貴族政治の孤立的態度をとらず、教養と技能とが恣意と支配との手段とならないよう、上からは主権制度により、下からは職業団体の権利によって制御されるのである<sup>93)</sup>」と言っている。このようなヘーゲルの見解は、明らかに絶対王制の哲学的反省にはかならない。そこにおいて政府の職務に献身する普遍的階層としての中間階層とは、官職ブルジョワジーのことであり、その基盤がブルジョワ地主層或はさらにブルジョワ貴族層であることは言うまでもない。

16世紀から18世紀末にいたるまでのフランス絶対王制の基柱となった官職ブルジョワジーこそは、まさに当時において国家の意識および最も優れた教養の存した典型的な社会階層であったのであり、公正と知性とに関して国家の基柱たらんと志向したのであった。つまり彼らの社

会的役割は、絶対王制の統治権の代行者であったとともに、アンバール・ドゥ・ラ・トゥールのように、教育的階級として国民の教育者ともなった<sup>94)</sup>。

しかし宗教戦争にいたるまでは、ブルジョワ地主層は、彼らと同様に富農層から析出された産業的中産者層とある程度同一の絆で結ばれていた。その出身からして旧封建領主層に対する利害が同じであるかのように思われたからである。それ故その段階までは、経済的合理主義と知的教養とを武器として成上がったブルジョワ地主層は、ボルケナウの言うように、新しい生活形態のためのイデオロギー的指導の役割をある程度果しえたかもしれない。それはルネサンス・ユマニズムの進歩的役割である。しかし反面、その段階では未だ反省的客観的な学問の成立の条件は熟していない。彼らの思想は、多分に修辭的で技術的でまたしばしばスコラの粉飾にまみれている。ところが宗教戦争を前後して、寄生的なブルジョワ地主層と産業的中産者層との経済的及び政治的利害は、しだいに分離背馳していった。なぜなら寄生的なブルジョワ地主層は、官職保有者となり法服の貴族となる過程で、上昇転化したからである。つまり彼らは領主制反動を強化することによって、富農層および産業的中産者層の経済的政治的上昇の道を絶とうとしたからである。イデオロギー的にも、すでにルターとエラスムスとの訣別に見られるように、プロテスタンティズムとユマニズムとは分裂していった。

それ故、16世紀のユマニストと17世紀のデカルトやパスカルとの間に、本質的なイデオロギー上の相違があったとは思われない。なぜなら、彼らはいずれも、ブルジョワ地主という共通の社会階層の出身であったから。その理由はむしろ、アンリ4世のナントの勅令以後、ブルジョワ地主によってバック・アップされた絶対王制が、カルヴァン派ブルジョワジーの中核をなしていた産業的中産者層の利害をまったく裏切り、

92) G.W.F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, herausgegeben von Johannes Hoffmeister, Vierte Auflage, Hamburg, Felix Meiner, 1955, §. 289, S. 253. 高峯一愚訳『法の哲学』下、創元社、昭和36年、p.191.

93) *Ibid.*, §. 297, S. 258. 訳、下、p.198.

94) Imbart de la Tour, *Les Origines de la Réforme*, t.I, pp.455, 460 et 461.

ブルジョワ貴族はカスト化して領主制反動を強化し、ブルジョワ貴族と産業的中産者層の利害の対立が表面化してきたことにある。そのためブルジョワ貴族の中に花ひらいていたユマニスムは、その創造的生気を涸渇して、形式の彫琢のみに心奪われた古典主義となった。つまり17世紀の古典主義は、ルネサンス・ユマニスムの形式的典型化にすぎない。両者の間に本質的な相違があるわけではない。それ故、デカルトを「反ルネサンス」と規定するグーイエの見解は、思想の本質的内容を問題にすることなく、形式のみに拘泥したまったく皮相な見解にすぎない。

ただ17世紀になって、ブルジョワ貴族層が絶対王制の官僚組織の支柱になるとともに、すでに述べたように、彼らは産業ブルジョワジーと旧封建領主層との階級闘争における外観上の調停者として、つまり外観上の普遍的階層として、反省的客観的な知識の体系を構成する条件をととのえてゆく。デカルト哲学はそうした基盤の上に誕生した。

## VII 結論：ユマニスムとデカルト主義の 社会思想史的意義

フランシス・ベイコンは「知識は力である」と言ったが、それはユマニストにとって共通した、しかもきわめて現実的な意味をもった標語であった。なぜなら、しだいに社会組織や社会的拘束に従わされていった環境の中で、知識のみが活動することができたから<sup>95)</sup>。そして静態的な身分制社会のもとで、富農→ブルジョワ地主→官職貴族へと身分を昇格させることを可能ならしめたのは、まさに知識にほかならなかったからである。実際、そのおかげでベイコン卿の家柄も、農民から大法官にまで昇格することができた。またそれ故デカルトは、イエズス会の学院において人文学の教師から、「人文学によって、ひとは人生にとって有用なすべてのことについての、明瞭で確実な認識を獲得することができる<sup>96)</sup>」と説得されたのである。つまり、

知識の獲得は立身出世を約束したのである。

ところが身分制社会のもとにおいて、その社会の枠を変えることなく、第三身分から貴族身分へと成上がることは、当然パラドクサルな社会的条件をみずから担うことになる。ブルジョワ貴族という概念自体、パラドクサルなものである。実際、彼らは法服の貴族になるとともに、その出身身分を裏切って領主制反動を強化した。それにもかかわらず、彼らは生まれによる貴紳の階層からは「ブルジョワ」とさげすまれて、そのカストから排除されようとした。

ブルジョワ貴族の領主制反動についてはすでに述べたので、ここでは彼らと貴紳 *gentils-hommes* との身分闘争の問題を、ムーニエの所説を紹介しながらとりあげてみよう。

ローラン・ムーニエによると、貴族の身分は法的には第二身分であったが、社会的には第一の身分であり、すべての者がそれを目ざした身分であった。17世紀にはすでに、第三身分の上級の成員は、軍職によって、所領や封地の上での貴族的な生活によって、とりわけ授爵する官職の行使によって、貴族身分のあらゆる特権とともに、法的に貴族と認められるにいたった。「しかし社会的には、これらの貴族は貴紳 *gentil-homme* ではなかった<sup>97)</sup>」。剣の貴族たちにとって、法律屋は「ブルジョワ」にすぎず、彼らが貴族などとは思えないことであった。生れによる貴族はこぞって「フランスにおいては、剣の貴族しか貴族とは認められない」と言った<sup>98)</sup>。そしてフランス社会の軍事的性格を強調した。そうしたことは、すでに見たように、身分制社会の特性の強調にほかならない。

このようにして貴紳は、法服の貴族を貴族身分の外に押しやった。「1614年—1615年の全三身分会議において、大部分の法服の貴族は第三身分の中に席を置かれた。このようにして身分闘争がフランス社会を支配する<sup>99)</sup>」。そして法

95) Imbart de la Tour, *Les Origines de la Reforme*, tome I, p.451.

96) Descartes, *Discours*, AT.VI, p.4.

97) Roland Mousnier, *Problemes de stratification sociale*, p.33.

98) *Ibid.*, p.34.

99) *Ibid.*, p.35.

律家と貴紳との身分闘争は、全三身分会議の挫折をさえひき起すにいたった。貴紳たちは売官制を抑止することを要請し、或る若干の官職は彼らに絶対に留保されることを求めた。

それにもかかわらずブルジョワ地主は、貴族の土地を獲得し、官職を買い、長男を高等法院官僚とし、場合によっては娘を貧しい貴紳に縁づけるなどして、ひたすら貴紳の社会に迎え入れられることをはかった。実際、16～17世紀において、貴紳 *gentilhomme* はユマニストの人間理想を表現する言葉でさえあった。だが一般には、法律家は第三身分のままにとどまった。そのため彼らは、身分社会を階級社会に変えるためではなく、身分の位階秩序を変え、司法行政官を第一の身分として認めさせるための努力を、絶えず執拗に試みた。

法服の貴族の弁護人としてシャルル・ロワゾーは、公権力を行使する能力への関係によってすべてを秩序づけ、社会を命令する者と従う者との二つに分けている。命令する者は、王、行政官、職任官であり、従う者は、人民、すなわち聖職者、貴族、第三身分である<sup>100)</sup>。だがこうした見解を、身分制社会のもとにおいて正当化することは難しい。なぜなら貴紳は生れによる家柄のすぐれていることや血統の純粋さを主張するから。ロワゾーはかかる主張を次のように攻撃する、「神から直接に由来する人間の理性的魂は、……それがおかれている身体の子の質に、何ら自然的に参与していない<sup>101)</sup>」。そしてアリストテレスの『政治学』が、優れた両親から生れた者は優れているとして、貴族を生れによる徳としているのに対して、ロワゾーはかかる理論は虚偽だと申し立てる。ロワゾーによれば、すべては教育や範例や相続に依拠するのであって、血に依拠するのではない。それ故、貴族の権利は、自然権に由来するのではなく、むしろ共通の権利である。

ところでわれわれは、そこに明らかにデカルト的二元論の先駆を見出す（ロワゾーの身分論は

1610年に刊行されている<sup>102)</sup>）。つまり、ロワゾーの主張を推し進めれば、人間の貴いはの身体的血のつながりによるのではなくして、理性的精神を優れた仕方を用いることにある。ということになる。

血の純粋さによって領主制的土地所有の正当性を根拠づける封建貴族は、なぜ血の純粋さが貴いのかということになると、宗教的清浄と不浄との程度によって位階秩序をつけるカスト社会に固有の原理を借りてこななければならない。それ故旧封建貴族にとっては、カトリック教会が魂と身体（血統＝土地所有）の拠り所であった。なぜなら、カトリック教会こそは、伝承による神的な位階秩序の護持者であるとともに、中世封建社会において最大にして最も頑強な、領主制的土地所有者であったから。

当然、ブルジョワ貴族出身のユマニストは、血の純粋と神話的伝承に基づく位階秩序の拠り所として、カトリック教会の呪術的信仰を批判し、教会財産にからむ僧侶の貪欲を非難し、福音書の或はギリシャ・ローマ的理念に基づいて教会を改革すべきことを説いた。殊にエラスムスやルフェーヴル・デターブルの時代には、産業的中産者層とブルジョワ地主とが未だ利害の甚だしい対立にまでいたらなかったもので、現実に流布されている神話的伝承の権威の源泉を尋ねて、福音書からさらにギリシャ・ローマにまで遡り、原典の自由検討を試みることは、それだけである程度現実の位階秩序への批判につながっていった。それ故福音主義と古典研究とは、正統カトリック教会とそれに象徴される封建的領主制の機構にとって、まさにその権威の土台をゆるがす異端的危険思想と思われた。初期プロテスタンティズムとルネサンス・ユマニズムとの提携や、またそれらの創造的生气の秘密も、そこにあった。

さらに17世紀になってブルジョワ貴族と生まれの貴紳との間における身分闘争が激化し、一方知識階級である官職ブルジョワジーにバツ

100) *Ibid.*, p.38.

101) *Ibid.*, p.39.

102) *Ibid.*, p.25.

ク・アップされて学問の体系化が進められてくると、スコラの因果的推論による世界の神話的創造説の詭弁的正当化に対して、現実を自然法に照して批判し、孤独の中で直観的にその本質を把握構成することが求められた。また精神（法服の貴族の拠り所）と身体（平民および生まれの貴紳の拠り所）との実在的区別、および精神による身体の支配を、理論的に正当化することが試みられた。こうしたことが、17世紀におけるデカルト主義の社会思想史的意義である。その場合、かかる理論的正当化をなす拠り所が、神の超自然的啓示ではなくして、自然的な人間理性すなわち良識 *bon sens* であった。

だが、デカルト主義の理性概念が形而上的で、後にヒュームやカントなどによって批判されるにいたったのには、理由がある。なぜなら、デカルト主義の社会思想史的意義が、ブルジョワ貴族層の理論的根拠づけにあるとするならば、ブルジョワ貴族による土地所有のパラドクサルな性格を反映していてもやむをえない。すなわち、ブルジョワ貴族は、経済的財力によって成

上がりながら領主制的土地所有者となったのであり、その意味で神と富との二つの価値理念に兼ね仕えようとしたのである。そしてたとえそれがもはや旧封建領主のように神話的伝承と武力に基づくものでないとしても、前期資本による土地集積と経済外的な領主権力の行使を合理化することは、経済的にはできない。つまり土地所有は、いかに合理化しても、その根拠を神の中に求めるほか正当化しえない。それ故、たとえ世界に運動を与えるのに最初のひと弾きをさせるためだけでも、デカルトは形而上学的神の存在を必要としたのである。このようにして彼は、カトリック内部にとどまった形での理神論を超え出ることができなかった。

領主制的土地所有の正当化の論拠を真に批判するためには、現実の世界秩序の中に働いている神の実体的存在性を批判しなければならない。そうした批判は、ブルジョワ地主階層出身のユマニストによってではなく、産業的中産者層を中核としたプロテスタンティズムおよび啓蒙思想の展開を通じて行なわれていった。